

5. 古墳を地域資源化する（2）

—湯舟坂2号墳プロジェクトの2021年—

京都府立大学文学部考古学研究室

1. はじめに

京都府立大学文学部考古学研究室では、2020年度ACTR「丹後半島における文化遺産の地域資源化に関する総合的研究」（研究代表：諫早直人）に採択されたことを契機として、京丹後市教育委員会・京丹後市久美浜町須田区（以下、須田区）などと共同で、1981年に発掘調査がおこなわれ、豊富な遺物が出土した湯舟坂2号墳の学術的価値を再評価し、地域資源として今後活用していくための基礎資料の掘り起こしに着手した（諫早2021）。今年度は発掘調査40周年という記念すべき年であったこともあり、京都府立丹後郷土資料館において企画展「黄金の大刀発掘40年 湯舟坂2号墳細見」（2021年4月24日～6月20日）、京丹後市立丹後古代の里資料館において春季企画展示「地域の中の湯舟坂2号墳～発掘40周年記念展～」（4月24日～8月1日）が開催され、昨年度ACTRで取得した高精細写真や三次元計測データなどが一般にお披露目されたほか、本研究室と京丹後市教育委員会、須田区の主催による京都府立大学ACTR成果報告会in久美浜「地域資源としての湯舟坂2号墳」（7月24日）を開催するなど、目標に掲げた地域資源化への第一歩を踏むことができた。本稿では、今年度に本研究室、とりわけ学生たちが主体的に関わった取り組みについて紹介する。（諫早直人）

2. ACTR 成果報告会とパネル展示解説

上述の成果報告会は、1月23日と5月29日、二度にわたる緊急事態宣言を受けての延期を経て、東京オリンピック開幕翌日の7月24日に、京丹後市役所久美浜庁舎にて開催された（写真1）。当日は諫早直人による趣旨説明の後、1981年の発掘調査に関する奥村清一郎氏（元京都府教育委員会）による基調講演と、湯舟坂2号墳の発見前後の様子について新谷勝行氏（京丹後市教育委員会）、環頭大刀の保存・記録について塚本敏夫氏（元興寺文化財研究所）、湯舟坂2号墳の出土遺物などに対する高精細写真の再撮影について栗山雅夫氏（奈良文化財研究所）の報告があり、最後は菱田哲郎のもとでディスカッションがおこなわれた。ACTRメンバーに加えて、40年前の発掘担当者である奥村氏が加わったことで、湯舟坂2号墳発掘当時の状況から湯舟坂2号墳プロジェクトによる今回の再調査の内容に至るまでを総覧する、発掘調査40周年にふさわしい報告会となった。当日は京丹後市民を中心に、全国各地から75名以上の来場者があり、湯舟坂2号墳に対する関心の高さを改めて感じさせられた。

会場内では栗山氏撮影の高精細写真を用いたパネル展示や、相互技研による湯舟坂2号墳横穴式石室のVR体験などを併せて実施した（写真2）。パネル展示については、写真の選定から解説シートの作成などの事前準備、会場での写真解説までを学生有志でおこなった。来場者の中には発掘当時のことをよくご存じの方もおり、パネル展示解説を通して来場者と学生が直



写真1 成果報告会の様子



写真2 写真パネル展示の様子

地域の皆様へ

今年で湯舟坂2号墳発掘から40年が経ちました。この節目の年に久美浜町須田区、京丹後市教育委員会、京都府立大学を中心として、「湯舟坂プロジェクト」を進めてきました。このプロジェクトでは古墳や出土品、当時の調査を再評価し、それらを地域の文化遺産とすることを目指しています。

7月に行われた報告会では栗山雅夫氏（奈良文化財研究所）撮影の高精細写真パネル展が開催され、私たちが写真パネル展の解説シートを作成し会場で説明を行いました。

また新型コロナウイルスの影響で残念ながら今年度の古墳まつりは中止となりましたが、40周年を記念して湯舟坂2号墳の絵葉書を制作しました。

こうした活動を通して湯舟坂2号墳をはじめとする地域の文化遺産をより身近に感じてもらい、地域の中でこれからも守り伝えられていくことを願っています。

2021年10月17日
京都府立大学考古学研究室 学生一同

図1 地域住民へのメッセージ



写真3 湯舟坂2号墳プロジェクト
学生制作物集合（栗山雅夫撮影）

接交流する中で、様々な話をうかがうことができた。また会場内でパネル展示使用写真の人気投票を実施したところ、環頭大刀以外の遺物写真や遺跡の遠景写真などにも票が集まり、湯舟坂2号墳の多様な魅力について知ってもらう良い機会となった。（守田悠）

3. 発掘40周年記念ポストカードの作成と配布

湯舟坂2号墳のある須田区では、1982年以来、10月の休日に古墳慰霊祭をおこなってきた（新谷2021）。かつては慰霊祭後に開かれていた「古墳祭」は、2004年以来実施されていないが、現在は須田区公民館で地域住民によるビンゴゲームなどの交流会を実施している。今年度の交流会は本研究室も参加することとなり、湯舟坂2号墳や周辺の遺跡などを周遊するスタンプラリーの開催を学生が中心となって企画していた。残念ながら交流会自体は新型コロナウイルスの感染再拡大に伴い中止となってしまったが、その際の参加賞として準備していた発掘40周年記念ポストカードについては慰霊祭にあわせて作成した。高精細写真を用いた学生デザインによる3種類のポストカードは、湯舟坂2号墳に対する須田区民の認識を把握するためのアンケートや、湯舟坂2号墳プロジェクトの紹介や須田区民へのメッセージを記した学生からの手紙（図1）、ACTR成果報告会で配布した写真パネル展示の解説チラシとともに、自治会を通じて須田区の全世帯に配布した（写真3）。交流会中止により活用方法については方針転換を余儀なくされたが、全戸配布により思いがけず全須田区民に湯舟坂2号墳の魅力や本プロジェクトを知ってもらう機会が得られた。また回収したアンケートからは、本章第5節で

みるように湯舟坂2号墳に対する地域住民の認識や考えを知ることができ、今後の活動に活かすことのできる貴重なデータとなった。（吉永健人）

4. 古墳慰霊祭への参加

今年度の古墳慰霊祭は10月17日に開催された。上述のように当初参加を予定していた交流会は中止となったが、発掘以来、須田区でおこなわれてきた慰霊祭に研究室として参加する機会をいただいた。筆者を含む一部学生は前日より須田区に入り、前夜に須田区が古代の丘公園で準備を進めているライトアップ（写真4）を見学するなど、須田区の方々と学生が直接交流し、意見交換する貴重な機会となった。慰霊祭は、普段であれば湯舟坂2号墳においてすべてとりおこなわれるとのことであるが、当日はあいにくの雨天のため、須田区内にある大雲寺本堂にて読経などがなされた後（写真5）、湯舟坂2号墳現地に移動し、花と線香が供えられた。慰霊祭後は須田区の方々と、本研究室の教員、学生、京丹後市教育委員会の文化財専門職員により、今後の連携のあり方などについての打ち合わせがおこなわれた。須田区民からは、草刈りなど古墳の維持・管理の苦労や、単なる古墳調査に留まらない地元・大学・市による協力体制の構築を求める意見などが出された。（松田篤）

5. 地域住民の反応—成果と課題

湯舟坂2号墳及び周辺にある文化遺産の地域資源化を進めていくにあたっての課題を把握するため、学生主体で2回のアンケートを実施した。まず7月のACTR成果報告会において実施した参加者アンケート（有効回答49名）は、須田区民の湯舟坂2号墳に対する意識の高さが顕著に表れる結果となった。たとえば湯舟坂2号墳を訪れたことがある人の割合は、須田区以外の来場者が5割程度に留まったのに対し、須田区民は全員が行ったことがあると回答している。また、今後の遺跡活用に関する自由記述欄は全体に回答率が低い中、須田区民の回答率が圧倒的に高く、具体的な活用のアイデアや、活用主体に関わってこうとする記述も散見された。このように須田区民の湯舟坂2号墳に対する意識の高さを確認することができた点は、本成果報告会の成果の一つだろう。その一方で、少し気がかりとなったのが須田区からの来場者が6名と少なかったことである。その原因は一つではないだろうが、40年前の発掘調査の記憶がある方々の高齢化が進み、成果報告会の会場となった久美浜庁舎（直線距離5km）への足が遠のいたことなどが考えられる。



写真4 古代の丘公園のライトアップ



写真5 古墳慰霊祭の様子（大雲寺）

11月に実施したアンケート（有効回答73名）では、須田区の全世帯を対象としたこともあって、遺跡活用に対する地域の課題をより浮き彫りとする結果が出た。7割の方が湯舟坂2号墳を数年以内に訪れていたのに対し、京都府立丹後郷土資料館に保管されている出土遺物を数年以内に見た人は1割程度に留まった。冒頭で述べたように今年度は、宮津市にある丹後郷土資料館（直線距離23km）や京丹後市丹後町にある丹後古代の里資料館（直線距離25km）で湯舟坂2号墳に関する企画展がおこなわれ、前者ではほぼすべての遺物が展示されたが、成果報告会と同じく、資料館が須田区から遠く離れていることが足を遠ざけた可能性が高い。本プロジェクトで取得した高精細写真や三次元データが、須田区民や須田区にある遺跡と、湯舟坂2号墳を全国的に有名にした遺物の間の心理的距離をいかに縮められるかが、今後の活用にあたって重要なカギとなってくるのではないだろうか。

なお、昨年度から始まった本プロジェクトについては、知らない人が6割程度であり、自分たちの取り組みがまだ十分地域に浸透していないことがわかった。また、湯舟坂2号墳が地域にとってどのような存在かを問う質問では、「地域の誇り」と回答した人が4割近くいる一方で、「ただの遺跡」と回答した人も3割以上存在しており、地域住民の中でも古墳に対して抱いている思いは様々であることが読み取れた。アンケート以外にも、地域住民と関わる中でその成果と課題が浮かび上がった。

以上の取り組みを進めるにあたって、岸本卓也区長をはじめとする須田区の方々からはたくさんのご厚意を受け、京丹後市教育委員会の奥勇介氏にも久美浜駅―須田区間の送迎や現地案内などをしていただいた。このように本プロジェクトを契機として考古学研究室と京丹後市、須田区の間、湯舟坂2号墳をはじめとする須田区の遺跡の活用に向けて動いていく雰囲気が醸成され始めた一方で、須田区の方々からは大学が具体的に何を目指しているのかがみえない、学術的な調査だけでなく古墳の草刈りなどの地域でおこなっている日常的な作業にも協力してもらえるような関係をつくってほしいといったご意見もいただいた。こうした地域住民から出された率直な意見の中には、今後、湯舟坂2号墳をはじめとする須田区の遺跡の地域資源化に大学が何らかの寄与を果たすにあたって、乗り越えなければならない課題が隠されているのではないだろうか。

（土井悠起）

6. おわりに

以上、学生たちの取り組みを中心に今年度の本プロジェクトの一端を紹介した。一見すると課題が山積しているようにもみえるが、それらはすべて昨年度来の実践の中で顕在化したものである。湯舟坂2号墳によって結ばれた不思議な縁に感謝しながら、文化遺産の地域資源化に関する最適解を探す試みを、学生たちと一緒に、ひきつづきこの地で続けてみたい。（諫早）

参考文献

- 諫早直人 2021 「古墳を地域資源化する―湯舟坂2号墳プロジェクトの挑戦―」『京都府立大学文学部歴史学科 フィールド調査集報』第7号 京都府立大学文学部歴史学科
- 新谷勝行 2021 「湯舟坂2号墳の発掘調査がもたらしたもの」『京都府立大学 ACTR 成果報告会 in 久美浜 地域資源としての湯舟坂2号墳 発表資料集』京都府立大学文学部考古学研究室